

古代日本語の音節構造の変遷に関する私見

〈キーワード〉語の多音節化 音節構造の変遷

釘 貫 亭

一 はじめに

日本語の音節構造の変遷について、いろいろな見解が対立しているが、奈良時代末から平安時代にかけて音声言語における顕著な変化があったのは、知られた事実である。そのなかに音節構造の変化に関するものも含まれている。

上代特殊仮名遣の崩壊が奈良時代語と平安時代語を分ける標識として位置づけられているのを始め、ハ行転呼音やイ・ウ音便の発生が単純語中の母音連接を出現させ、最終的に語中の長母音を生ずるに至った。さらに漢語の影響であると推定されている促音、撥音などの特殊音節の出現など、一連の変化が伝統的な日本語の音節構造であるCVCVという単純な音素配列の秩序に重大な変更をもたらした。

これらの事項それぞれの音韻史上の意義付けについて

の考察も大切であるが、如上の諸現象が奈良時代末頃から平安時代前半にかけての近接した時期に固まって生じていることなどから、現象相互の論理的関係が注目されるようになってきた。このような立場からする近年の論理的解明は、これらの歴史上の現象がいかなる原因によって生じ、何故その当該の時期に生じたのかを説明しようとしている点に特徴がある。これは、ひとり言語にとどまらず、およそ物事の歴史を扱う学問としてきわめて当然の態度といわなければならないが、事実の収集に優れた実績を上げてきた我が国語史学にとってはむしろ遅きに失した憾みすらある。日本語の音節構造の変遷といえ、シラビーム構造からモーラ構造へというおなじみのテーマが浮かぶのであるが、その内実の是非はともかくこれは古代語と中世語を分つ標識ともとらえられるきわめて大きな課題であって、小稿のよく扱い得るところではない。ここでは、ハ行転呼音や音便の発生によつ

て代表される伝統的〇く構造を崩した古代語内部の変遷を取り上げて、奈良時代の母音組織の改編をも含む古代語に生じた顕著な音韻変化に、統一的な説明原理を与えようとするものである。

二 ハ行子音の変遷とハ行転呼音について

奈良時代末期から平安時代にかけて生じた音韻変化の中で、最近関連づけて論じられてきているのは、ハ行子音の変遷とハ行転呼音の問題である。これらを相互に別々に生じたものとしてではなく一連の現象と見る立場から、説得力のある理論的説明が進みつつある。この問題について目的意識的に解答を与えようとしたのが林史典の論である。

「ハ行転呼音」とハ行子音の關係に関しては、従来、「ハ行転呼音」のような変化が発生している以上、すでにΦであったはずだとか、ハ行子音の推移も「ハ行転呼音」も、ともに唇音の退化現象であるとかいった見方で取り上げられてきたにすぎないが、もしも「ハ行転呼音」のような変化が、歴史的に安定したΦに突然発生していると考えたとしたら、そのような想定そのものが音韻史の常識を逸脱している。母音間のΦをw化したところのものは、外なら

ぬpからΦへの推移、すなわち、pの摩擦音化そのものだったと見るのが正当な見方であろう。そうだとしたら、両者は発生の時期と原因を異にするそれぞれ独立した変化ではなくて、切り離してとらえることの到底不可能な一連の変化、すなわち母音間Φのw化は、ハ行子音の摩擦音化に連動した一種の環境同化であると考えなければならぬ。^{注2)}

右の林説に対する疑問は、ハ行転呼音を引き起こした動因であるとされる「ハ行子音pの摩擦音化」が「何故平安時代に起こったか」を説明していない点である。林の説は、理論的な部分がある程度小松英雄に負うているので、この問題に関する小松の発言を見ておきたい。

ある特定の変化が、どうしてその特定の時期に生じているのか、すなわち、どのような動因がその背後に作用しているのかということが、国語史研究においては、中心的課題になってきている。ハ行転呼音と呼ばれるこの音韻変化についてもそういう観点からの説明はまだ与えられていない。^{注3)}

とした上で小松は、ハ行転呼音が生起した後のハ行子音の分布をめぐる状況をおよそ次のように述べる。すなわち、ハ行転呼音が完結した結果、ハ行子音を仮りにΦであるとすれば、Φは原則として語の第一音節に現れるこ

となり、語中でハ行音が保存されるのは、あさひ（朝日）ゆうひ（夕日）のような複合語下位成分の初頭ということになる。要するに、話線上に出現するΦは、語頭であるかさもなければ複合語の境界であって、ハ行転呼音生起後のΦは、各々かかる文法上の位置を標示するようになった、とするのである。

ハ行転呼音が生起した理由を、ハ行音の語頭標示機能の獲得と複合標示機能の発現との二つの点においてとらえるならば、これは、右に述べたところの日本語全体の動向の、その一環として位置づけることが可能であり、したがって、それが十一世紀を中心にして起こっている理由も説明できることになる。

ハ行転呼音の音韻史的意義付けを試みる小松の前掲の方法論批判についてはともかく、右の、当該現象が生起した理由を述べた結論については賛同しがたい。「ハ行転呼音が生起した理由」として小松があげている語頭標示機能と複合標示機能が、変化の結果新たに生じたというのであればまだしも、これらが変化の「理由」あるいは動因なのであるとすれば、音韻変化がある特定の端正な、しかも変化以前の体系にとっては未知の機能を獲得するための目的な方向性をとるといって、誠に考えにくい結論に陥るであらう。音韻変化の研究において目的方

向性が実証されたことはない。

ところでハ行転呼音という音韻変化を考える場合、林や小松のような機能論的なアプローチは事実の歴史的評価として大切なことである一方で、実際に生じた音声推移をどの様に想定するかということも学説の説得性の観点から欠かすことができない。ハ行転呼音の音声推移を早田輝洋は、次のように推論する。

私は語中の清子音は、ハ行子音に限らず一般に有声音的であったと考えている。したがって、非鼻音の清濁の対立は無声／有聲ではなく、非鼻音／鼻音と考える。例えば、ハ行子音は語頭で「p」、語中で「β」（「Φ」の有声音）であるのに対して、バ行子音は「p」であったと考える。（「オモホス」√「オボス」／omop—as—u／omofosu）√[ombosu]の例参照。）母音間でハ行子音が「β」であってこそ、わずかに摩擦がゆるむだけで「w」に転呼しえたのである。またカ行子音も語中で摩擦的有声音であったればこそ「白き」√「白い」、「白く」√「白う」のような音便現象も無理なく説明できる。すなわち、／siro—ki／[sirogi ~ siroj] > [siroj]、／siro—ku／[sirogu ~ sirowu] > [sirowu]。〔~〕は「g」の摩擦音であり、後続する「i」や「u」

の調音位置に引かれかつ摩擦が弱まったと考えられる。^{注6}

早田の論は、清濁の対立を通説のように無声／有声とするのではなく、非鼻音／鼻音ととらえる独自のものであって、そこから導かれた多音節語の発音傾向についてリアルな論を提供しており、学説として奥行きのあるものとなっている。このように、早田の論は音声学的推論においてリアルであり、ハ行転呼音の発生の仕組みを無理なく説明し得ているように思われる。この考え方のさらに優れたところは、高山倫明が述べているように、ハ行転呼音だけでなくイ・ウ音便の発生をも同時に音声学的に説明し得ている点である。^{注7}

ただその場合であつてもなお残る疑問は、ハ行転呼音とイ・ウ音便を媒介する母音間の子音の「摩擦の弱まり」が、何故奈良時代に生じているのかを説明していないのである。このような現象が、上代を通じて存在し続けていたのであれば、ハ行転呼音やイ・ウ音便が奈良時代においてすでに常態化していなければならないと思われるにもかかわらず、文献資料による限り、そのような兆候は見いだせそうにない。

林説における「p音の摩擦音化」と早田説における「母音間清子音の摩擦の弱まり」は、いずれも音声的に

は語中語尾の発音の緊張のゆるみに帰せられるのであらうが、一連の音韻変化の根本的動因ととらえられている肝心のこれらの現象が何故問題の時期に生じているのかが問われていないのである。

以上、諸家の見解を見てきたのであるが、方法論批判と研究の方向にはある程度の一致が認められるけれども、ハ行転呼音が何故平安時代に生じたのかという肝心の目標地点にはいずれの研究者も到達しているとは言えないのが現状である。そこで小稿ではこの課題を解決するために、奈良時代から平安時代を通じての趨勢であるといわれている語の多音節化傾向に注目してみたい。

三 (単位) 語の多音節化傾向と音韻変化

奈良時代を通じての趨勢であつた語の多音節化傾向と音韻変化との関係については従来、上代特殊仮名遣の崩壊との関連で言及されてきた。

馬淵和夫によれば、古代の日本語には、現代より数多くの音韻が存し、それが十分な価値をもつてはたらいっていた理由は、後代に比べて、当時の語の音節数の少なさに求められる、という。このような状態においては、音韻の数の多い方が意味の分化によく対応しうるからである。しかるに、奈良時代には既に単語が多音節化すると

いう傾向が存在していた。そういう時代にあつては、音節数の過多は、かえつて語の弁別には無用の長物となるに至つて、近い音域關係にあつた i と i、e と e、o と o の混同がはじまつたのである、としてゐる。^{註12}馬淵と同趣旨の記述が亀井孝、阪倉篤義、釘貫らにある。

上代特殊仮名遣に反映してゐる奈良時代の母音組織は、平安時代初頭にはほぼ解消したといわれている。このような崩壊現象が起つた要因の一つとして、これらの音韻的対立が語の意味の區別にそれほど貢献していない、つまり機能負担量 ^{註10}rendement fonctionnel が小さかつたことが関わつてゐる。上代語の資料から得られるこれらの音韻的対立の最小対 ^{註10}minimal pair は、オ列の場合には少数でありイ列エ列においてはほんの数える程度しか存在していない。^{註11}つまり、これらの対立は解消されたとしても、言語伝達に際してさほどの障害をもたらさなかつたものと考えられるのである。このうち、相対的に豊富な資料を提供してくれるオ列音の場合で考えてみよう。オ列兩類の音韻的対立が a と u の対立などよりも体系貢獻度が低いのは、有坂法則と呼ばれる古代国語の音節結合法則の存在に原因がある。これは次のような現象を指している。^{註12}

(1) 同一結合単位内にはオ列甲類音と乙類音は共存し

ない。

(2) 同一結合単位内にはオ列乙類音とウ列音は共存しにくい。

(3) 同一結合単位内にはオ列甲乙兩類の母音は共存しにくい。

この場合の「結合単位」とは語根や形態素に近似するもので意味を持つ最小の音節結合要素である。

意味を持つ結合単位内でのオ列甲乙兩類の母音の、かかる排除的な分布は、音韻的対立を構成する場合の阻害要因として働く。音韻的対立を構成する有利な条件とは対立要素がいかなる音声環境にあつても自由に、しかも多数出現することではなければならない。有坂法則のような、弁別的機能を邪魔するような、癖のある分布は何のために存在しているのであろうか。それはこの法則が、奈良時代以前のある時期まで文法的語彙的な単位を標示する機能を担つていたと考えられるのである。現実の談話のなかで、この法則が聞き手に対して意味を有する単位をまとめあげて標示する働きを担つていた。これはアクセントの持つてゐる単位統一標示機能に類同のものであるが、この働きによつて聞き手はヒヤリングの際の負担を大幅に軽減することができる。オ列兩類の対立崩壊は、この有坂法則の解消と密接に関わつてゐるのである。

さきに挙げた有坂法則は、奈良時代文献に見えるオ列兩類の音の現れ方をすべて説明しているわけではない。たとえば、甲類音と乙類音の出現頻度にはきわめて大きな落差があり、甲類音はごく限られた環境にしか用いられない。このころ（心）もの（物）その（苑）こと（事、琴）このの（九）との（殿）ころ（頃）などオ列音が連続するような場合はほとんど乙類が立ち、甲類が出現するのは、もも（股）ここ（擬声語）しのの（擬声語）などの数例にすぎない。また、甲乙の最小対は、こ^マ／こ^コ（此）、こ^フ・ふ（恋）／こ^フ・ふ（乞）、と^フ・ふ（問）／と^フ・ふ（詠）など有坂法則の規制外の位置でもかた語頭という限られた状況で構成されている。このように全体的にみてオ列甲類音は乙類音に比べて使用頻度が低いのである。結局、大部分の甲類音は、法則の第二則と第三則によって支えられた存在だとも言えるのである。したがって、法則の規制が解消されることは、オ列甲類音の発音を維持する意義も同時に解消されるということにならざるを得ない。実際この対立の解消は、甲類音が乙類音によって吸収されることによって進行したのである。結局、この法則がなぜ不要になったかと言えば、古代における文法論的語彙論的な単位が「結合単位」から想定されるようなものから、今日と同様の「単語」に

移行したからであると考えられる。それは馬淵和夫が説明したように、古代語において単位語の音節数が増加しつつあった事から推測できる。^{註14}

このような「語」の多音節化は、ただでさえ小さな機能負担しか持たない上代特殊仮名遣の弁別的機能を一層弱めた事は言うまでもないが、最も重要な点は、このような多音節化によって「結合単位」の存在意義が消滅したことである。これによってオ列二類対立の存在意義も無くなったのである。

一般的に見て、機能負担量が小さいからと言って直ちに音韻的対立が解消されるわけではない。そうでないとすれば、上代特殊仮名遣の崩壊が奈良時代末まで持ち越されたことの説明が困難になるであろう。有坂法則に反映したような単位の統一標示機能が有効に働いている間は、たとえ機能負担量が小さくても対立は解消しない。

ところが、奈良時代において進行していた「語」の多音節化傾向が有坂法則の単位統一標示機能を空洞化するに及んでオ列甲類音の発音の維持が困難になり、二類の対立も解消したのである。この事実が奈良時代末に生じた根本的原因はここにある。

奈良時代を通じての趨勢であった文法的語彙的単位が多音節化現象は、従来の日本語の音節構造に大きな変革

をもたらしたと思われる。このような単位語の多音節化は、総語彙に占める同音意義語の比率を相対的に減少させ、聴覚レベルでの「語」の同定を容易化したと考えられる。これは、注5に引用した小松論文の一節「語句のまとまりが外形のうえから容易に識別できる方向をしないでたどっている」という状況と恐らくは同一のものであるが、それはあくまで結果としてそうなったということであって、音韻変化がそのような状態を「めざした」と考えてはならない。このような過程を経た結果、発話に際して個々の音節を丁寧な発音し、かつ聞き分けるといふ圧迫から話者を解放し、次第に単語の音特徴を全体として一まとまりに統合標示するように発音し、聞き分けるといふ状態が音声言語全体に広がったと見られる。個々の音節を丁寧な発音し、聞き分けの必要が弱まったことによって、旧来型の結合単位を標示する機能を担っていた有坂法則は、存在基盤を失い、必然的にオ列二類の区別も必要性を失ったのである。

四 八行転呼音と音便発生の原因

奈良時代語を通じて進行していた単位語の多音節化傾向によって、三音節を超えるような多音節語が新たにしかも多量に出現するようになった。多音節語の発音傾向

は、一、二音節語と違って同音異義語の存在を予想しないので、比較的ゆるんだ調音が許容されたと考えられる。三音節を超えるような多音節語と一、二音節語との発音傾向の違いについて、宮城県方言の動詞語尾におけるアウ・オウの音訛の実態報告がある。

〔宮城県〕県下一般 第一条の類ハ「タ、カウ」「ヤシナウ」「ワラウ」ノ如ク発音ス 但シ本県ノ北部ニ於テハ「這ふ」「舞ふ」ノ如キ二音ノ動詞ニ限リコノ例ニ発音スレド三音以上ノモノハ「たたこー」「やしのー」「わろー」トヤウニ発音スルガ普通ナリ 国語調査委員会「音韻調査報告書」明治三八年
茨城・群馬・山梨の各県の報告にも同種の報告があるという。加藤正信は、如上の報告を踏まえつつ次のように述べる。

アウ類においては「a:」と訛る一地点をのぞいて、訛形は二拍語には起きず、三拍以上の語に起きている。(中略) オウ類は調査語が多くないので規則を導き出すには至らないが、訛形が二拍語に比較的小なく、三拍語にはやや多いという傾向は指摘できそうである。(中略)

各地点で二拍語が訛らないのは、もし、これらが訛って「[a:]」とか「[a:]」のように一シラブルに

なると、アクセントを別に考えても、まぎらわしい同音語が多くなるためと思われる。二拍語だけが非訛形である理由をもっとほかに探せば、次のようなことも考えられる。三拍語のたとえば「笑う」の訛形 /waroo/ や /warau/ は、/waraQ - ta/ /warawa - n e/ などと少なくとも /wa/ の部分は共通する。しかし、二拍語のたとえば「買う」がもし訛形の /koo/ や /kuu/ であるとして、/kawa - n e/ /kaQ - ta/ /kae/ (二拍語の場合は [kɛ:] に訛りにく) などと共通の音の拍を持つことができなくなり、同一語としての認識に不都合が生ずるためかとも考えられる。[a:] という訛音ならば二拍語でも許されていることはこの面からも説明がつく。

ところでハ行転呼音は、このような単位語の多音節化の動きによって、個々の音節を丁寧に発音しかつ聞き分ける必要性から解放されたという条件下においてはじめて可能であった変化であると考えられる。林がハ行転呼音生起の動因とみなした「母音間の p の摩擦音化」も、早田がハ行転呼音とイ・ウ音便生起の動因とみなした「母音間の清子音の有声音化」も、三音節以上の多音節語内部でのゆるんだ発音傾向を指すものであるとすれば、

より一層の説得力を持つ。

多音節化によって古代日本語に新しく登場してきた語形は、同音語の少なさ故に特に語中語尾の調音を多少ルーズに行なったとしても、語の同定の容易な点は一、二拍語に比較すべくもない。多音節化によって引き起こされたハ行子音の調音のゆるみとこれに引き続くハ行転呼音が、何故平安時代に生じたのかという理由は、如上のような歴史的事実を考慮してはじめて理解が可能になるのである。

一方、音便発生の歴史的条件についても語の多音節化の趨勢の存在が予想されるのであるが、このことを指摘しているのが小松英雄である。

上代の日本語が単音節性—monosyllabism—であったとまでは規定すべきでないが、おおくの単音節語をふくむ、みじかい語を中心にそれが構成されていたことは事実である。

(中略)

もし、日本語の単音節語が子音の脱落を起こして母音一つだけの音節になってしまったとしたら、事実上、語の同定が不可能になる。したがって、単音節語や、それを上位形態素としてもつような複合語には音便を生じえない。音便が平安時代になってか

ら発達したことの一つの理由としては、多音節語の比率が増大したことによって、音便をおこしうるだけの土壤ができあがっていたということもある。^{註16}

小松は、音便の発生に、語の多音節化傾向がその条件として存在したことを示唆しているが、この両者の間に具体的にどのような音声現象が介在して音便の発生に至ったのかまでは述べていない。

先の第二節で、清濁の概念に関わる早田輝洋の論を引用したが、早田の述べるような、語中における清子音の摩擦の弱まりとそれにもなる有声音化は、多音節語の内部において一層よく妥当するものである。このような現象は、日本語が一、二拍語を中心に構成されていた時代、すなわち個々の音節を丁寧に発音しかつ聞き分けなければ語の同定が困難であった時代において一般的であったのではなくて、三音節を超える様な多音節語の存在が中心的位置を占めるようになってはじめて顕在化した歴史的な現象なのであろう。

音便とは、このような歴史的条件のもとに、三音節を超えるような多音節語の内部で発生してきた現象なのである。

五 多音節化は、何故奈良時代に起こったか

以上述べてきたような古代日本語の語彙文法的単位が多音節化傾向は、上代特殊仮名遣の崩壊、ハ行子音の変遷とそれに連動するハ行転呼音の発生、さらに音便の発生という重大な音韻変化にいずれも本質的な形でかわっており、しかもそれらの共通の動因になっているという、従来考えられていたよりもはるかに大きい役割を果たしているのではないか。そして恐らくこの動きは、やがてア・ヤ・ワ行の音節の統廃合に収斂し、古代語そのものを解体させる方向で最終的に決着したものと思われる。

さて小稿では、一連の音韻変化が何故奈良時代末から平安時代にかけての時期に生じたのかを解くキークードとして、単位が多音節化傾向によって括ったのであるが、結局、これらの変化の根本的動因となったこの多音節化傾向が、何故奈良時代に生じたのかという問いが最後に残ったのである。筆者は、この傾向の背景に律令国家体制の成立にともなう伝達要求の飛躍的な増大と言う言語外的要因の存在を見たい。壬申の乱（六七二年）の後、国家官僚制の成立とともに文書主義が社会的慣習として定着した結果、日本人の言語生活をめぐる環境が従来と一変した。識字層が、貴族階級のみならず、上層庶民にまで及びつつあったことは、戸籍・計帳作成の際の資料

となる自己申告書である「手実」の存在からもうかがえる。天武・持統朝を境に多量出土する木簡や正倉院文書の伝える文書洪済の実態、さらに記紀風土記などの歴史書、地理書や万葉集のような記載文学の成立など、文字で記された上代の文化遺産のほとんどすべてが律令体制確立（七〇一年）後の百年足らずの時期に集中して生み出されているのである。社会的変革期において、言語伝達の要求が充満したであろうことは、室町時代と明治時代がやはり言語の変革期に当たっていたことから想像されよう。

〈注〉

1、『音韻史の展開―音節構造の変遷―』『国語学会平成5年度

秋期大会要旨（於・北海道大学）』

2、林 史典「『ハ行転呼音』は何故『平安時代に起こったか』

―日本語音韻史の視点と記述―『国語と国文学』

第六九巻、第一号、一九九三

3、小松英雄「母語の歴史をとらえる視点」林四郎編『応用言

語学講座1』明治書院一九八五

4、小松前掲論文

5、小松はハ行転呼音が「母音間に挟まれたウが自然な過程をたどってwに漸移的に移行したわけではなく、語頭標示と

いう新しい機能を獲得するために、語頭以外の位置にあるハ行音を他に追いやったかのように見ええる」と一応控えめな表現をとる一方でやはり彼が音韻変化を目的方向的なものとしてとらえていることは、論文中の次の一文によつてかなり明確に知ることができる。「語調標示の施された文献資料から知られるところによると、文献時代になつてからも、日本語においては形態素が高い独立性を保ち続けていたが、そのような状態の中にあつて、語句のまとまりが外形のうえから容易に識別できるような方向をしいだいたどっている。連濁・連声・音便、そして語調の再調整などは、具体的現象として区々であつても、一次的には、すべてそれをめざした変化であつたと考えられる。」

注2 前掲論文

6、早田輝洋「生成アクセント論」『岩波講座日本語5音韻』一

九七七

7、高山倫明「連濁と連声濁」『訓点語と訓点資料』第八八輯、

一九九二

8、馬淵和夫「清濁小考」田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論究

2』和泉書院 一九九二

9、馬淵和夫「上代のことば」至文堂 一九六八

10、亀井孝（書評）大野晋「上代仮名遣の研究―日本書記の

仮名を中心として」『言語研究』二五・一九五四

